

忘れる、できなくなるのはダメなことではなく、  
人間が人生をまっとうしているプロセスのひとつ



阿久根 賢一



四代目 桂春團治 師匠



認知症になった方が、いかに自由に生活ができるかを追求して、  
一冊の本にまとめました。(阿久根)

**阿久根** 春團治師匠には豊泉家グループで、娯楽やエンターテインメントを統括しているCEO（チーフエンターテインメントオフィサー）を務めてもらっています。豊泉家グループで高齢者の方々に笑いを届けたり、お弟子さんを派遣していただいたりと、豊泉家の笑いの部分をプロデュースしていただいていますね。今日は師匠には認知症ケアの観点とともに、「豊泉家×笑い」を主なテーマとした視点からお話をお伺い出来ればと思っていますので、よろしくお願いします。

**春團治** こちらこそ、よろしくお願いします。

**阿久根** 私ども豊泉家グループでは、R&D＜研究・開発＞発表会を行なっていて、今年で16回目となりました。私はその第1回から、認知症ケアについての研究をしてきました。それを一冊の本にまとめたのが、この「認知症イノベーション 一人ひとりの“パラダイス”を創造するケアメソッド」です。豊泉家をご利用いただいている方は、皆さん楽しそうだと仰っていただいています。そのために我々がどうしているか、認知症の方のケアに対する考え方をまとめたものなんです。

**春團治** ほう、そうなんですか。興味深いですね。

**阿久根**



私は2003年から、認知症をテーマに研究を続けてきました。今回、書籍にまとめようと思った理由は、認知症に関する本は世の中に、すごく沢山あるんです。それなのに、実態に応じた入居者の支援であったり、変化などに言及したものが少ない。そこで現場実践を通じて研究し、そこに行き着いたんです。そのことを、世の中に伝えていきたい。認知症になられると今まで築いてきたものが失われたり、それまでの自分たちのライフスタイルが一変してしまったりします。認知症はそうやっていとも簡単に、自分自身をなくしてしまうリスクがあるんです。これからの日本では、高齢者の5人に1人が認知症になると言われており、いつ、誰がなってもおかしくありません。なので、そうなった時にいかに幸せな環境を創れるか、いかに自由に生活ができるかを追求して、一冊の本にまとめました。

**春團治** 僕にとって認知症は身近な話でして、自分の年齢からもそうですし、それに以前テレビ番組で、壱家は認知症になりにくいとやっているのを観ました。これは失礼ですが、その番組で学者かどっかの先生が、学校の先生は認知症になる確率が高いと言っていたんです。それはなんでかという、学校の先生がされる講義の内容は毎年決まっている。そやけど壱家はお客さんが毎日、替わる。その都度、お客様の反応が気になって、ボケてられへん。だけど、壱家は認知症になりにくいというのは、ちょっと違っていましたな。大変なご恩をいただき、人間国宝にもなられた桂米朝師匠が、晩年は認知症になっておられましたから。

**阿久根** そうだったのですか。

**春團治**

最近、ときどき嫁はんに「ボケたん違う？」って、からかわれるんです（笑）。自分でもたまに「オレ、ホンマにボケてんのか？」となることもありますけど、でも「違う、これは元来のオレのクセや」と思い直したりするんですけどね。でも不安であることは、確かです。いつ、豊泉家の皆さんのお世話にならないといけないか、わからないですからね。そういう意味では、残念で悔しいんですけど、不安が付きまとうことは事実ですね。



**阿久根**

今回出版します「認知症イノベーション 一人ひとりの“パラダイス”を創造するケアメソッド」は、豊泉家として新しい認知症ケアの考え方を世に出していく本になっています。この本の一番のポイントは、自分たちが信じてやってきたケアが、実は間違っていた。それを受け止めることから、始まっています。そうするのは、専門職として相当な勇気が必要なことでした。でも、これは真面目で純粹だからこそ、出来たのではないかと思います。自分たちのケアと、入居者の笑顔とがマッチしていない。そう感じたことをきっかけに、自分たちを疑ったんです。

**春團治** なるほど、それは素晴らしいですね。

**阿久根**

入居者の方に課題があるのではなく、自分たちのケアに問題がある。そう思ったことが起点なんです。私たち豊泉家ではケアワーカーのことを、フェローと呼称してしまっていて、手前味噌ですが純粋な人間が多いんです。そういう意味では豊泉家のフェローだからこそ、自分たちを疑うことを出発点に出来たのかもしれない。